

コリント人への手紙第一11章 「礼拝の秩序」

1A 女の被り物 1-16

1B 信者の模範 1

2B かしらの連鎖 2-6

3B 創造の順序 7-12

4B 自然 13-16

2A 主の晩餐 17-34

1B 貧しい人への無配慮 17-22

2B 主を覚える晩餐 23-26

3B 主の裁き 27-32

4B 食事への待ち合わせ 33-34

本文

コリント人への手紙第一11章を開いてください。パウロは、この章から 14 章まで、「教会の公の礼拝における秩序」について話します。11 章には、女の被り物についてと、主の晩餐について。12 章から 14 章で、御霊の賜物、特に異言についてであります。これまでの問題と共通する問題が根っこにあります。彼らが、すべてのことは許されているという謳い文句で、自分の利益のために自由でありたいと思うあまり、いろいろな問題が起こっていました。彼らは、愛によって人が育てられるということが、まだまだ分かっていません。秩序の乱れも、自分たちがしたいと思っていることをするという自由の濫用から来ているものです。今日も、「自分のことは自分で選択しなければいけない、それを妨げる社会のあり方が間違っている。」という考えが強いですね。男女の違いは、ジェンダーの違いは間違っているということも高々に言われています。コリントの町にある文化と似ている面があります。

秩序の乱れは、人が神の真理を知るのに妨げになります。人が福音を信じるのに妨げになるし、また人がキリストにあって成長する妨げにもなります。当たり前のことですが、私たちが何か心身に障害や病を持っている時に、それが、子供の時、若い時に安心できる環境にいなかったということがあげられます。父が、威厳をもって子を訓練し、母が愛情をもって育てるという環境に、何かしらの欠けがあって、あるいは片親が不在で、それが心身の成長、人格の成長の妨げになります。成長には、安心できる平安があるということ、健全な権威が自分の上にあることです。神の国というのは、神が主権者となり、神の権威があらゆる所に広がっていることによって、人々が安心して生きることのできる状態を指しています。(イザヤ 11:9 参照)

彼らの主張する、「古くからのしきたりだからそうしたものは要らない」ということ思想や哲学は、

ある意味で正しいのかもしれませんが。男尊女卑、社会的な差別などが、秩序という名の下で制度のように固定化されていたことがあります。けれども、福音は、もっと高い次元で私たちを自由にしています。それは、たとえそうした歪んだ制度があっても、その中でキリストにあって喜び、平和、自由を得ることができるからです。そして、キリストの愛に満たされて、差別されている人々にも等しく良い行いをしていき、それによって人の尊厳が守られていくのです。さらに、悪しき制度そのものも変わる原動力となるでしょう。けれども、制度を直すよりも大事なことは、すべての人を敬っていくということです。

そこで、前回パウロが、私たちに教えた指針がありました。10章の最後の2節です。「³² ユダヤ人にも、ギリシア人にも、神の教会にも、つまずきを与えない者になりなさい。³³ 私も、人々が救われるために、自分の利益ではなく多くの人々の利益を求め、すべてのことですべての人を喜ばせようと努めているのです。」つまずきを避けるということ。また多くの人々の利益を求めるとのこと。それは、何よりも人々が福音によって救われるためです。また、救われている人々が霊的に成長するためです。

1A 女の被り物 1-16

1B 信者の模範 1

¹私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。

パウロが、自分の生活の中で、キリストに倣う者としてどう生きるのか模範を示していました。今、読んだように、だれに対してもつまずきを与えない。多くの人々の利益を求めるとのことです。キリストご自身が、人間の文化の中に生きられたことそのものが、すでに、このことを示していました。神の身分であられる方が、そのあり方に固執なさらずに、人の姿を取り、その中に生きてくださいました。神の御子ご自身ですから、あらゆる権利があります。人の文化は、神の創造された元々の姿から墮落しています。けれども、人が、ご自身の贖いによって救われるために、悔い改めと信仰に導かれるために、そうした文化の歪みに敢えて触れなかったのです。

それにしても、「私に倣う者でありなさい」というのは大胆な発言です。しばしば、私たちは次の言い訳をしてしまいます。「私を見ないで、イエス様を見てね」と。けれども、イエス様は、私たちをご自身の証人となることを願われているのであり、私たちがキリストに倣うことによって、人々がキリストを知ることができるようにされているのです。もし、言葉だけの証しで救われるのであれば、イエス様は、肉体を取られないで、天に留まっていて、「おーい、お前たち救われなさい！」と声をかければよかったです。けれども、愛と真実の行いを、その肉体においてお見せになったからこそ、人々は救われました。同じように、私たちがイエス様に倣っていく中で、人々が私たちを通してキリストを知ることができます。

2B かしらの連鎖 2-6

² さて、私はあなたがたをほめたいと思います。あなたがたは、すべての点で私を覚え、私があるあなたがたに伝えたとおりに、伝えられた教えを堅く守っているからです。

パウロが、「私はあなたがたをほめたいと思います。」と言っているところは、驚きです。いろいろな問題があるのに、彼らをほめています。そうですね、コリントにある教会の手紙だけを読みますと、問題を正しているのが目立つのですが、パウロは、「兄弟たち」と彼らと呼んでいますし、よく読むと、信仰による父と子の関係のようなものがあるようです。いわば、子どもが思春期に反抗しているような、そういった心の複雑さを、コリントの人たちは持っていたのではないかと思います。親のすべてに反対しているのではなく、自分の部屋があって、自分の生活はしっかりと親に頼っているのですから、反抗していても、否定しているわけではありませんね。彼らは偽教師たちに影響されて、パウロのことを批判している人たちがいたのですが、それでも、自分たちはパウロから教えられたことを基本、守り行っていました。

言い伝えについて、しばしば否定的に取られる傾向があります。それは、イエス様が、パリサイ派が人の言い伝えを教え守っていて、神のことばをないがしろにしていると言われることを思い出すからです。しかし、イエスご自身が守るように教えられ、それを使徒たちが教えて、行いによって示したことは、私たちは言い伝えとして守っていくべきです。イエス様は使徒たちに、「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。」と言われていました(マタイ 28:20)。そして、パウロがテモテに自分の教えたことを守りなさいと言っているところがあります。「Ⅱテモ 1:13-14 あなたは、キリスト・イエスにある信仰と愛のうちに、私から聞いた健全なことばを手本にしなさい。14 自分に委ねられた良いものを、私たちのうちに宿る聖霊によって守りなさい。」私たちが、このようにして新約聖書をしっかり学び、それを今の生活の中でどのようにして実践すればよいかを祈りつつ、考えていく時、まさに言い伝えを守っている、ということになります。

³ しかし、あなたがたに次のことを知ってほしいのです。すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。⁴ 男はだれでも祈りや預言をするとき、頭をおおっていたら、自分の頭を辱めることとなります。⁵ しかし、女はだれでも祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭を辱めることとなります。それは頭を剃っているのと全く同じことなのです。⁶ 女は、かぶり物を着けないのなら、髪も切ってしまいなさい。髪を切り、頭を剃ることが女として恥ずかしいことなら、かぶり物を着けなさい。

コリントの人たちで、公の礼拝で女が被り物をしていなかったという、従来の習慣とは違ったことをしていました。今、私たちの住んでいるところでは、女性が被り物をしていないので、このことに意味合いが分からないと思います。そこで説明をします。

地中海を取り囲む地域では、男が女性の髪の毛を見て、情欲を抱くというものがありませんでした。それで、外に出る時は被り物をして隠すという習慣がありました。今でも、それを宗教の教えとしているのがイスラム教ですね。髪の毛は必ず隠さないといけません。今でいうならば、女性が水着やレオタードの姿をしていたら、男性の好奇心の対象となり得ますね。スポーツの大会などの目的に適う場所であればそういうことはありませんが、街中をそのような格好で歩いたら目を覆いたくなります。そこで、ギリシア・ローマの社会で、被り物をしていない女性がいたら、その人は遊女の場合が多かったです。

しかし、そうした被り物は、ある意味で女性蔑視の象徴のようにも見られていた感じがします。ギリシアとローマ社会では、女性は動物よりはまし、というような見方がされていました。二流市民でありました。尊厳がありませんでした。一部の高貴な女性たちの間に、自由や権利を謳歌するために、被り物を外すことがあったようです。しかし、その中で、ユダヤ教があり、またそのユダヤ教の中で、キリストの福音が、宣べ伝えられました。ユダヤ教にはすでに、「神を敬う貴婦人たち(使徒 13:50 等)」が、そうした抑圧の中で、イスラエルの神に望みを置いていました。

さらに、女性の尊厳を認めていたのが、私たちの主ご自身であり、その福音です。福音書を見れば、それが顕著に表れていますね。主は、長血を患う女に対しても、姦淫の現場で捕らえられた女に対しても、「娘よ」とか、「女の人よ」とか、相手への親愛また敬意を示す言葉を使われ、ご自分の救いを同じように与えられました。パウロは、福音においては、すべての人が一つになっている、平等であることを、次の言葉で言い表しています。「ガラ 3:28 ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由人もなく、男と女もありません。あなたがたはみな、キリスト・イエスにあって一つだからです。」事実、ローマの初代教会には、当時、見放されているような女性たちや子どもたちが多くいたという記録があります。

そこで、コリントの女性で信者になった者たちが、被り物を外して、礼拝を献げ、祈ったり預言していたりしていたのです。自分はキリストにあって自由になったのだから、被り物についても自由になったのだというしるしとして、それを取って行ったのです。けれども、それを未信者が見たら、教会には遊女がいるところなのか？というつまずきを与えることでしょう。また、他の地域の教会の人びとが見たら、強い違和感を抱き、一致が難しくなります。

この問題に対して、パウロは、神の立てた秩序を教えています。「すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」これほど、男と女の違いを示している言葉はありませんね。今のジェンダー平等という謳い文句には、性そのものが中性化している、男女の区別をなくすという流れがありますが、非常に危険です。なぜなら、天地を造られた神が男女を創造し、人を男と女に造られた時に、この秩序をお立てになったからです。古今東西、どの文化に行っても、男女の関係はいろいろな違いがありますが、それでも、男らしさと女らしさの違いはど

こにでもあります。それは、天地を造られた神がそう決められたからです。

ここで大事なものは、これは尊厳であるとか、価値が、女が劣っているということでは全然ないことです。あくまでも秩序であり、権威系統の話をしています。先ほど見たように、男も女もキリストにあって一つです。全く平等なのです。けれども、秩序があります。分かりやすくいうならば、会社で部下が上司の言うことを聞くことで、初めて組織が成り立ちます。学校で、生徒が先生のいうことを聞くことで初めて学校が成り立ちます。選手たちは、監督の言うことを聞いて、初めてチームとして機能します。では、上司と部下に尊厳の違いがあるでしょうか？生徒と先生に尊厳の違いがあるでしょうか？監督と選手の間はいかがでしょうか？尊厳の違いは全くありません！けれども、権威系統があることで、人々は一つになって動くことができます。上に立てられている人を敬うことによって、また上に立てられている人も自分に従う人々を敬うことによって、その秩序があって始めて、平和があるのです。

そして大事なものは、権威というのは一つでないといけないということです。「キリストのかしらは神です」とあります。三位一体の神ご自身の中に秩序があります。キリストのかしらが神です。そして聖霊は、父なる神と御子によって遣わされて、キリストの証しをされます。権威は父なる神にあり、その権威に従うのでキリストにあらゆる権威があり、キリストを証しするから聖霊に力があるのです。全く同じ神のご性質を持っていて、一つであります。そこにも列記とした権威があるのです。ゆえに、みんな仲良く一つになって、だれも上に立とうとする人がない、という状態を、日本人が美德としていますが、そんなことはあり得ません！これは言い換えると妬みの文化ですね。村八分の文化とも言えます。ちょっとでも、人の上に立っていると、平等という名でその人を潰しにかかります。必ず権威系統が、人々の集まりには出てくるのです。

それでパウロは、被り物の習慣について説明しています。これは、一般の社会における習慣です。けれども、そこに神の定めた男女の秩序が反映されているのであり、それを無碍に否定することはないということです。そして、パウロは髪の毛についても触れています。現代文化とは違い、女性は髪の毛を長くして、男性はそうではなかったのでしょうか。だから、被り物をしていないというのは、女性が女性らしさを出している髪の毛を剃ってしまうようなものだと言っています。髪の毛も、文化の違いこそあれ、女の人が長くして、男は短くしていますね。

3B 創造の順序 7-12

⁷ 男は神のかたちであり、神の栄光の現れなので、頭にかぶり物を着けるべきではありません。一方、女は男の栄光の現れです。⁸ 男が女から出たのではなく、女が男から出たからです。⁹ また、男が女のために造られたのではなく、女が男のために造られたからです。

パウロが、「女のかしらは男」と言ったことの根拠を述べています。神の創造の順番です。神が、

アダムを造られました。そしてアダムの脇から、エバを造られました。男は神のかたちに造られ、女は男から、神のかたちに造られました。また、男のために女が造られました。男がエデンの園に置かれ、そこを耕し、守らせていましたが、神は、「2:18 人がひとりであるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」と言われて、女を造られたのです。

¹⁰ それゆえ、女は御使いたちのため、頭に権威のしるしをかぶるべきです。

これは、とても興味深い言葉です。御使いが、礼拝の中にいるということ、私たちはあまり考えたことがないですね？けれども、天において、どれほどの御使いが神に仕えているかは、黙示録を見ればよく分かります。つまり、公の礼拝は、天の続きなのだということです。御霊によって、天にある幸いを味わうために、地上における教会の礼拝があります。このことを覚えれば、私たちがどれほど礼拝を軽んじてしまいがちなかが分かります。礼拝に、地上の社会的地位を持ち込む話ではないのです。そこは、神の御座がある天が、御霊によって地において降りてきているというか、その一部を地上で行っているところなのです。そこには、御使いがおり、主ご自身がおられるのです。そして、私たちはその中で、礼拝、すなわちひれ伏して、神を拝するのです。

そして、御使いは、パウロの手紙などで、「支配、権威、権力、主権」などと呼ばれています(エペソ 1:21)。厳格な権威系統の中で、御使いたちは動いています。その御使いたちが礼拝において、神に仕えているのですから、彼らのためにも、頭に権威のしるしをかぶるべきだということです。男と女の間にある権威も、礼拝において重んじるべきだということです。

¹¹ とはいえ、主にあっては、女は男なしにあるものではなく、男も女なしにあるものではありません。

¹² 女が男から出たのと同様に、男も女によって生まれるのだからです。しかし、すべては神から出ています。

パウロは、誤解を受けないように、先ほど私が説明したことを説明しています。男と女は、男がいつも上で、女が従うということだけではないのだということです。女は男から造られましたが、その後の男は女から産まれました。そこから、男と女は相互に助け合っている存在、どちらも互いに必要な存在なのだということです。

4B 自然 13-16

¹³ あなたがたは自分自身で判断しなさい。女が何もかぶらないで神に祈るのは、ふさわしいことでしょうか。¹⁴ 自然そのものが、あなたがたにこう教えていないでしょうか。男が長い髪をしていたら、それは彼にとって恥ずかしいことであり、¹⁵ 女が長い髪をしていたら、それは彼女にとっては荣誉なのです。なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです。

パウロは、神の創造の順序の他に、自然の感覚として恥ずかしいことですね、と言っています。被り物を外すことは、髪の毛を切るような恥ずかしいこと。髪の毛は、女の人が長くて、男の人は短いという自然の感覚にも外れています、と言っています。

¹⁶ たとえ、だれかがこのことに異議を唱えたくても、そのような習慣は私たちにはなく、神の諸教会にもありません。

ここでパウロは、これが彼の意見であるけれども、神の諸教会では、礼拝において女が被り物をしていて、女と男がキリストにあって一つだからといって、被り物をしないという習慣はないと言っています。公のところに行くのに、女の人が被り物をしないというのは、敢えてそうしないといけないということですね。今とかなり習慣が違います。

この 11 章のパウロの教えに基づいて、今のカトリックや正教会、プロテスタントの諸教会の一部に、礼拝を献げる時に被り物をしています。けれども、このパウロの意図は、そこにないと思います。神が自然に与えておられる秩序があって、自分たちの生きる社会にもその秩序に基づく習慣があって、福音によって自由になったといっても、それを敢えて変える必要はない、その習慣に従うことのほうが、神の栄光を表すのだということでもあります。例えば、日本での親孝行があります。ある宣教師がこう教えていました。「親を敬わないといけないのは、学校でそう教わっているから、親がそう言っているからではなく、神が命じているからだよ。」神が命じているからということ、結果的に、親孝行になるようなことをしても、それで神の栄光が現れるということです。

2A 主の晩餐 17-34

1B 貧しい人への無配慮 17-22

¹⁷ ところで、次のことを命じるにあたって、私はあなたがたをほめるわけにはいきません。あなたがたの集まりが益にならず、かえって害になっているからです。

パウロは、話題を女の被り物から、主の晩餐、聖餐式についての話題に移しています。ここでの口調が一気に変わります。女の被り物については、注意程度のものでした。けれども、次に出てくる、聖餐に対する秩序の乱れは、主の裁きが既に現れているという深刻なものでした。主が、死に渡される最後の夜、過越の食事、弟子たちに行いなさいと命じられたことを行っているはずの集まりが、益にならず、かえって害になっていました。

¹⁸ まず第一に、あなたがたが教会に集まる際、あなたがたの間に分裂があると聞いています。ある程度は、そういうこともあろうかと思えます。¹⁹ 実際、あなたがたの間で本当の信者が明らかにされるためには、分派が生じるのもやむを得ません。

教会の中で、主の聖餐について分裂が起こっています。まず、どんな分裂かを語る前に、分裂そのものについて、仕方がない分裂もあると但し書きを書いています。本当の信者が明らかになるための分派です。これは、すでにコリントの教会に偽教師たちがいることを示唆しています。第二の手紙で、そうした者たちの姿をかなり明らかにして、パウロは暴いています。そうですね、一致という名の下で、偽の教えが入り込んでいるのをそのままにするのは悪です。例え分裂が起こっても、真理を守るためであれば仕方がないことです。(Iヨハネ 2:19 など)

²⁰ しかし、そういうわけで、あなたがたと一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにはなりません。²¹ というのも、食事のとき、それぞれが我先にと自分の食事をするので、空腹な者もいれば、酔っている者もいるという始末だからです。²² あなたがたには、食べたり飲んだりする家がないのですか。それとも、神の教会を軽んじて、貧しい人たちに恥ずかしい思いをさせたいのですか。私はあなたがたにどう言うべきでしょうか。ほめるべきでしょうか。このことでは、ほめるわけにはいきません。

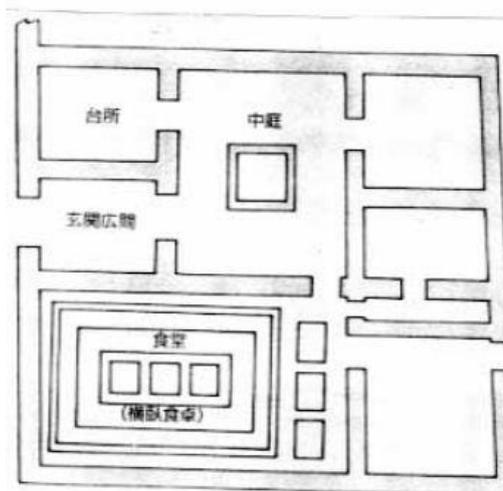
この言葉を理解するには、私たちが守っている聖餐式と当時のそれが、かなり異なっていることを説明しないとイケません。新約時代の教会、少なくともコリントにおける聖餐式は、ユダヤ教の過越の食事のやり方を踏襲していたということです。それは、私たちがわずかなパン切れと、小さなグレープジュースのコップを取っているのとは違って、過越の祭りの祝いの中で、フルコースの食べ物が出る食事があったということです。教会によっては、礼拝が終わった後の昼食を愛餐会と呼んだりしますが、当時の聖餐式は、聖餐と愛餐会が合わさったような形で執り行われていたと考えられます。前回の偶像礼拝についてのパウロの教えでも学びましたように、食べるという行為は、一つになることを意味していました。主と一つになる、また主にあって互い一つになることを意味していました。共に食べるということが、礼拝と結びつくのはそのためです。



そして、当時の教会の多くは、家で行われていました。そのような家は、多くの人々が入らないといけなないので、比較的、裕福な人の家が開放していたと考えられます。当時のローマの家は、トリクリニウムと言われるところで、優雅に食事を取ります。日本語では、横に臥せると書いて、横臥^{おうが}食卓というようです。寝椅子と呼ばれる、ほとんどベットに近いような長椅子を三つ、コの字に並べます。そして、肘で上半身を支えて、横になりながら食べるのです。そう、主に言いつけられて弟子たちが探した、最後の晩餐も、二階の大広間の客間だということですが(ルカ 22:12)、トリクリニウムだったと思われます。そして、

中庭があって、天窗のある広間でアトリウムと呼ばれるものがあります。そこは、人々は、所狭しと、肩を並べて座って食べていました。いわば、お客さん用にゆったりできる部屋があり、台所の隅で食べることのできる空間で食べているのと似ているかもしれません。

そして、ローマ社会は、富裕層と貧しい人がくっきりと分かれるような社会でした。食事においては、富裕層はトリクリニウムで食べ、貧しい人たちはアトリウムで食べ、くっきりと食べる場所も分かれていたのです。



おそらく、次のような状況が出来ていたのでしょうか。聖餐式といっても、しっかり食事が用意されます。その家の人々が用意するのでしょうか。私も、何度か、ユダヤ人の過越の食事に参加したことがあります。イエス様を信じるユダヤ人です。日没から始まり、9 時近くまで続きます。全体で、4 杯のぶどう酒にあずかります。そして、メイン・ディッシュであり、焼いた子羊の肉は後半部分に出てきます。ですから、お腹が空きます。主を礼拝するための食事なのに、いつものお腹が空いて早く食べたいという、食欲のほうが先立ってしまいます。それで、貪って食べてしまう誘惑が出てくるのです。

日頃は、普通のローマ社会の中で生きている人々ですから、コリントの人たちで、裕福な人の家に集まっている中で、トリクリニウムのほうに行くのは、おそらく同じような階級の人々、裕福な人々が入って行ったのだと思われます。そして、彼らが、腹が減っているということで、がつついて食べています。そして、アトリウムにいる貧しい人たちに、十分に食べ物が回ってこないということが起こっていたのでしょうか。貧しい人にとっては、そこで食べるものが唯一の、おいしいもの、栄養価の高いものです。ですから、主に感謝して、おいしいものを食べるということができずに、恥ずかしい思いをさせていた、ということになります。こうやって、ローマにおける富裕層と貧困層の区別が、教会にも入り込んでいたのです。

しかし、これは教会に深刻な問題を起こします。教会は、キリストにあつて奴隷も自由人もないところ。貧しい人こそが、信仰で富んでいるのです。それを具体的に示さなければいけないところ。愛の行いによって、それを示します。そこに、異質なローマ文化を持ち込んでいます。先ほどの、男女の秩序とは違う問題です。神の栄光ではなく、人の栄光が入り込んだのです。

2B 主を覚える晩餐 23-26

そして、これらの食事が、主を覚えるための聖餐であるという目的さえ、見失われていたようです。

²³ 私は主から受けたことを、あなたがたに伝えました。すなわち、主イエスは渡される夜、パンを取り、²⁴ 感謝の祈りをささげた後それを裂き、こう言われました。「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」²⁵ 食事の後、同じように杯を取って言われました。「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」²⁶ ですから、あなたがたは、このパンを食べ、杯を飲むたびに、主が来られるまで主の死を告げ知らせるのです。

パウロが先に、「伝えられた教え(2節)」と言いましたが、食事をしてパンを裂き、ぶどう酒を飲むというのは、主ご自身から伝え聞いて、それをパウロがコリントの人たちに伝えていたのです。それは、ただ、むしゃむしゃ食べるものではなく、まさに主の死を覚えるものだったのです。過越の食事の場面から、聖餐式を教会が執り行っています。主が行うように命じられているからです。パンを食べるのも順番があり、あるところで、イエス様が「これはあなたがたのための、わたしのからだです。わたしを覚えて、これを行いなさい。」と言われました。そして杯も、三杯目の贖いの杯と呼ばれているものを飲む時に、「この杯は、わたしの血による新しい契約です。飲むたびに、わたしを覚えて、これを行いなさい。」と言われたのです。このことで、エジプトから脱出させてくださった神の御業を覚えることが、キリストにあつて、罪から解放されて、神の裁きが過越すという、キリストが過越の子羊になったことを記念する時に変わったのです。

3B 主の裁き 27-32

このようにして、食事が単なる食事ではなく、主のからだをわきまえる厳粛なものであったのに、それをないがしろにしていたために、見える形で主の裁きが現れていました。

²⁷ したがって、もし、ふさわしくない仕方でパンを食べ、主の杯を飲む者があれば、主のからだと血に対して罪を犯すこととなります。²⁸ だれでも、自分自身を吟味して、そのうえでパンを食べ、杯を飲みなさい。

ただ貪って、がつがつ食べて、貧しい人々を顧みなかったのですが、これらは、主のからだと血に対する罪なのです。主の死を覚えること、これが食べていることの意味でした。ぶどう酒、グレープジュースの分量も足りず、食べるパンの量も少ないので、そのような誘惑が来ることは今はないかもしれませんが、けれども、主のからだに傷つき、砕かれたのが、私の癒しのためなのだ、ということをごだけ覚えて、主ご自身を覚えてパンにあずかっているでしょうか？また、新しい契約が、罪がすべて赦され、清められるという契約をごどれほど覚えて、ぶどう酒にあずかっているでしょうか？こういったところで、自分自身を吟味する必要があるのです。

²⁹ みからだをわきまえないで食べ、また飲む者は、自分自身に対するさばきを食べ、また飲むことになるのです。³⁰ あなたがたの中に弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいるのは、そのた

めです。

先ほど、女たちに被り物をするように教えていた時に、御使いのために、権威のしるしとしてかぶりなさいと言っていました、それと同じです。単に、食べ物がそこに並んでいるわけではありません。主ご自身がおられて、私たちが、パンとぶどう酒にあずかることによって、そこで霊においても、肉においても癒しの御業を行なわれるという、厳粛なものなのです。その働きを、自分の身勝手な思いで台無しにするのであれば、自分を癒すはずの礼拝が、自分に病をもたらす裁きの場になってしまうのです。

この記録は、旧約にも新約にもあります。旧約においては、アロンの息子ナダブとアビフが、主が命じたものではない、異なる火を主の前に献げた、とあり、その火が彼らを焼き尽くしてしまいました。主がアロンに、「天幕にはいる時には、ぶどう酒や強い酒を飲んではならない。死ぬことのないようにするためだ。(レビ 10:9 等)」と命じられました。息子たちはぶどう酒を飲んでいて、その酔いから、勢い余って至聖所の中に入って行ったのではないかと思います。新約においては、アナニアとサツピラです。本当は、土地を売り払ったすべての代金を持ってきたわけではないのに、すべてを持ってきたとペテロに言いました。それは聖霊に対する欺きであるとペテロが言ったら、アナニアも、サツピラもその場で死んでしまったのです(使徒 5 章)。

³¹ しかし、もし私たちが自分をわかまえるなら、さばかれることはありません。³² 私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることがないように、主によって懲らしめられる、ということなのです。

自分をわかまえることについて、午前礼拝でお話をしました。私たちが、主によって自分を知っていたくことによって、つまり、自分自身のことを主が教えてくださることによって、私たちはわかまえることができます。そしてわかまえることができれば、そこに主の、罪の赦しと豊かな憐れみが流れるのです。

そして、ここで主の裁きといっても、今、見ましたように、弱い者、病い、死というようなところに現れたもので、永遠の裁き、罪に定められる裁きではないことを、パウロは教えています。あくまでも、主によって懲らしめられることです。それで、むしろ罪から離れて、世と共に裁きを受けることのないようにするためです。パウロは、2 章で、木や藁、石や、金や銀で作った建物が、火によってどうなるかということと話して、火によって損害を受けるけれども、かろうじて自分自身は救われるという話をしていました。また、近親相姦を犯していた男については、彼が交わりから外されることによって、サタンに引き渡し、それで彼が罪を悔い改めて、主の日に救われるようにするという話も話していました。主からの懲らしめと、主による罪定めは大きな違いがこのようにあります。主は、私たちが世の裁きから免れるために、罪を捨てることができるようにするために、かえって懲らしめる

ことがあるのです。

4B 食事への待ち合わせ 33-34

³³ ですから、兄弟たち。食事に来るときは、互いに待ち合わせなさい。³⁴ 空腹な人は家で食べなさい。あなたがたが集まることによって、さばきを受けないようにするためです。このほかのことについては、私が行ったときに決めることにします。

主のからだをわきまえるというのは、苦しみを受けられた主を覚えることであると同時に、ここに書いてあるように、主のみからだである兄弟たちを顧みるということです。主の交わりにあずかるだけでなく、共に主にあずかるのです。互いに一つになっていることを示しています。ですから、ここで起こっている、富んでいる者と貧しい者の間で食事のために起こっている分裂は、深刻だったのです。

そのようなことのないために、パウロが指導しました。第一に食事に来るときは、待ち合わせるということです。先に来た者がががつ食べるのではなく、ある程度集まってから、共にあずかるということです。第二に、ががつ食べるほど空腹であれば、前もって家で食べていなさいということです。主を覚える食事なのですから、そこに集中できるように、ある程度食べておきなさいということです。このようにして、自分自身をわきまえて臨むことにより、主の裁きではなく、むしろ主のなされたい、癒しを経験できます。